

知的障害養護学校小学部におけるリズム同期のための自作曲の活用

齋藤 一雄*

リズム同期に関する自作曲を養護学校小学部高学年の学級を対象とした音楽の授業に組み込み、自作曲が実態にあった楽曲として活用できるか検討した。自作曲「手をたたこう」と「手拍子パン」は、4/4拍子8小節の短い曲で、前半はタイミングに合わせて手をたたき活動やこぶしをあげる動作を設定し、後半は四分音7拍と四分休符1拍のパターンや拍打ちを課題にした。その結果、タイミングに合わせて手をたたいたり、こぶしをあげたりする活動は、リズム同期への興味・関心を高めることができ、リズムパターンに手拍子で合わせる活動では、パターンの理解や休みへの対応、運動の持続などの問題が影響することが示唆された。8小節の自作曲は、知的障害養護学校小学部の児童にとっても、活用できるものであった。

キーワード：知的障害児　リズム同期　自作教材

I 問題と目的

知的障害児を対象とした養護学校、特に小学部の段階では拍やリズムパターンに合わせて手拍子したり、楽器を演奏したりすることが課題となる。しかし、歌唱に合わせて手拍子したり、打楽器の演奏を行ったりしているが、リズムに合わせるというリズム同期の発達に視点をおいた実践報告は少ない。その原因として、児童の実態に即した教材が少ないこと、リズムに関する表現力の伸長に重きをおかずに、楽しい音楽活動にねらいをおいていることが考えられる。

知的障害養護学校用に文部科学省著作の音楽科教科書（以下、☆本）と教科書解説があり、それらに掲載されている教材は音楽等の授業で活用することができる。特に、リズム同期の教材として歌唱教材を活用することは、児童が知っている曲が多い、歌詞とリズム同期のパターンが一致している、歌うことより手拍子等で同期する活動は親しみやすいなどの点で有効であるが、リズムパターンが複雑だったり、変化が大きかったりするなどの問題点も指摘できる（齋藤、2004）。

そこで、リズムパターンやフレーズがわかりやすく、手拍子する部分がとらえやすく、親しみやすい8小節の短い曲を自作し、小学校特殊学級の音楽の授業

で活用した。その結果、最初の段階から積極的な反応がみられ、リズム同期の指導を進めることができた（齋藤、2006）。ここで使用した自作曲は、4/4拍子8小節に曲で、「それ拍手オーツ」と歌詞に合わせてこぶしをあげる活動や擬音に合わせて手拍子する活動が効果的であった。

本研究では、知的障害養護学校小学部の児童を対象として、4/4拍子8小節で、歌詞に合わせた動作や擬音に合わせた手拍子を組み込んだ曲を自作し、音楽の授業に組み込み、音楽やリズムに合わせた活動がどのようにできているかを検討することにした。

II 方法

1 対象

対象は、養護学校小学部の高学年の学級（3組）である。3組は、5年生3人（男子1・女子2）、6年生2人（男子）の5人からなり、2人の教員で担任している。5人の児童は、ダウン症や脳性まひの児童、発語のない児童、難聴の児童、情緒が不安定になりやすい児童、ことばや文字による表現ができる児童と多様な実態にある（表1）。

身辺処理は自分ででき、日常の言語指示を理解し、相互に友だちとかかわりをもつことはできるが、細かい部分で大人の援助が必要である。また、学校や学級の生活には慣れたが、全般的に自信をもった表現はみ

* 上越教育大学障害児教育講座

表1 3組の児童の実態

児童	音楽に関する実態
M 5年	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の意味や曲の特徴，リズムパターンやフレーズに合わせた表現ができる。 ・旋律楽器に興味を持ち，簡単な旋律の曲を弾くこともできる。 ・正確で集中した反応が課題である。
N 5年	<ul style="list-style-type: none"> ・吸気と息を吐くことが十分ではなく，発声の量と持続に弱さがある。 ・ドからソまで，鍵盤楽器を順に弾くことができる。 ・歌や楽器で表現したい意欲はあるが，表現できないもどかしさを感じている。 ・歌詞の意味や曲の特徴，曲のテンポに合わせた表現が課題である。
O 5年	<ul style="list-style-type: none"> ・拍やリズムパターン，フレーズを聴き取って，手拍子や打楽器の演奏ができる。 ・自分の歌や演奏，身体表現について，振り返ることができていない。 ・いろいろな音や音楽を経験し，歌や楽器演奏での約束にそって表現することが課題である。
P 6年	<ul style="list-style-type: none"> ・歌が好きで，音楽に合わせてハミングしたり，覚えて口ずさんだりする。 ・終始と休みを感じ取り，手拍子や打楽器の演奏ができていない。 ・曲の部分を感じ取り，はっきりした発声で歌うことが課題である。
Q 6年	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を聴いたり曲に合わせて楽しそうに踊るが，特定の人や音に反応しやすい。 ・拍やリズムパターンを正確に手拍子や打楽器によって演奏することができていない。 ・曲の部分を感じ取り，はっきりした発声で歌うことが課題である。

られず，表現方法も1歳台～6歳台の発達段階にある。

音楽への興味・関心はそれぞれもっており，口ずさんだり，楽器をたたいたり，曲に合わせてダンスをしたり，マイクを持って歌ったりする児童もいて，それぞれに楽しむことはできている。さらに，様々な楽器の音を聞き取る，友だちを模倣して身体表現をする，簡単なメロディを鍵盤楽器で演奏する，歌詞のイメージをとらえて元気に歌う，そして，集団での取り組みや個々の表現の幅を広げていくことが課題である。

2 研究内容と方法

1) 自作曲を組み込んだ授業の展開

(1) 授業の展開

学級の指導計画に基づいて，単元を構成し，授業を展開する。授業は，毎回VTRで記録する。

(2) 日時

2005年6月7日(火)～7月14日(休)
11:20～12:00

(3) 指導者

S：筆者 W：担任1 F：担任2

(4) 場所と配置

養護学校小学部3組教室(図1)

(5) 単元名

「元気な声で，すてきな音で」

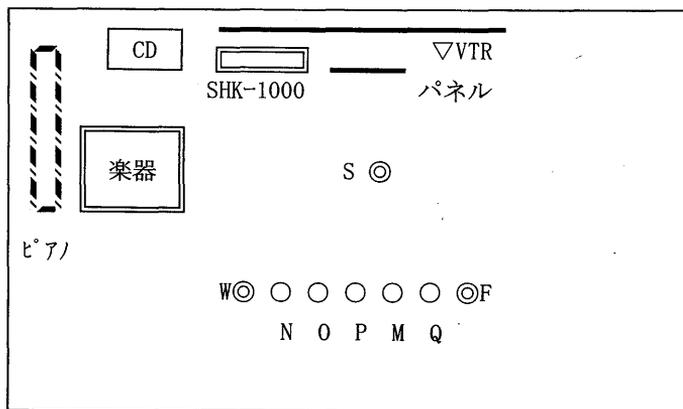


図1 教室の配置図

表2 指導計画

活動	6/7火	9木	14火	16木	21火	23木	28火	30木	7/6水	7木	12火	14木
1) 歌であそぼう	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2) みんなで手拍子												
①最速手拍子	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②3つのテンポで	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③リズムパターン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④自作曲	○	○○	○	○	○○	○○	○	○				
3) 元気に歌おう	「カレーライス」・「あめふりくまのこ」						「大きなうた」・「ツッピンとびうお」					
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4) すてきな音を きいてだそう	「シンコペイテッド・クロック」						「アビニョンの橋で」					
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(6) 単元設定の理由

3組では、これまで一学期前半「なかよくしてね」「はじめまして」の曲で友だちと一緒にうたと身体表現、「なかよしマーチ」に合わせて鈴、カスターネット、太鼓の演奏、「ロンドン橋」「子犬のビンゴ」の鑑賞を行った。

一学期後半は、梅雨から夏への季節を感じる歌を取り上げ、挿し絵に描かれた情景と歌詞を結びつけて理解し、元気に歌うことができるようにしたいと考えた。また、曲の一部を旋律楽器で演奏できるようになってほしいと考えた。

そこで、単元名を「元気な声で、すてきな音で」とし、最初に、「頭の上でパン」(おざわたつゆき作詞作曲)の曲に合わせて身体表現した。次に、リズム同期に関する実態把握の課題を設定し、続けて自作曲に手拍子等によってリズム同期する課題を設定した。そして、「カレーライス」(ともろぎゆきお作詞、峯陽作曲)「大きなうた」(中島光一作詞・作曲)を元気な声で歌い、季節や行事に合わせて「あめふりくまのこ」(鶴見正夫作詞、湯山昭作曲)「ツッピンとびうお」(中村千栄子作詞、櫻井順作曲)の曲で歌詞と視覚的なイメージを重ねながら歌うことを課題とした。最後に、「シンコペイテッド・クロック」(ルロイ・アンダーソン作曲)「アビニョンの橋で」(フランス民謡)の曲では、鑑賞だけではなく、ウッドブロックや鍵盤ハーモニカの演奏を合わせて行うことにした。

児童の実態や季節にあった教材や活動であり、楽器を使って音をだす活動も設定でき、歌詞や絵をとおして記憶やイメージを引き出し、身体表現によって身体の動きを活発にすることができると考えた。

(7) 目標

・「頭の上でパン」の歌詞に合わせて顔の横・へその前・しりの後ろで手をたたく。

・曲の一部や拍、リズムに合わせて手拍子や鍵盤ハーモニカなどで演奏する。

・先生や友だちの声や動きを模倣して歌ったり身体表現したりする。

・挿し絵の情景と歌詞を結びつけて理解して歌う。

(8) 指導計画

表2のとおりである。

2) 自作曲におけるリズム同期

VTRから児童個々に「オーッ」「パン」に合わせて動作ができたか、手拍子については1小節単位で合わせることができたかどうかを筆者と担任で確認し、同期できた割合を算出した。また、合わなかった場合は、動作を行ったかどうか、どのようなタイミングで、どのようなリズムで手拍子したかを記譜した。

Ⅲ 結果と考察

1 自作曲「手をたたこう」

自作曲「手をたたこう」は、4/4拍子8小節の短い曲である(楽譜1)。齋藤(2003)の教科書の教材分析から、おんがく☆とおんがく☆☆においては8小節前後の曲が多く掲載され、児童の発達段階にみあった選曲がなされていると指摘されていることから、同期が可能になる段階の児童には長すぎず、短すぎない小節数として8小節を選んだ。また、歌詞と動作のイメージが重なるように、動作の準備の間を用意し、さらに、児童が反応しやすいと考えられる動作やかけ声をいれた。リズムパターンは、四分音7拍と四分休符1拍によるリズムパターンの拍打ちを課題とし、パターンの最後に四分休符を加えて、半終止と終止がわかるようにした。

そして、「手をたたこう」の歌詞の後に「オーッ」といってこぶしをつきあげる動作を2回くり返した後に、4/4 ♪♪♪♪ | ♪♪♪♪ | のフレーズを2回手

拍子する構成とした。

歌詞と動作が一致するようにした「オーッ」の部分では、M、N、Oは教師を模倣して、最初の段階から動作とかけ声ができ、M、Oは80%以上「オーッ」に合わせて動作ができ、Nは前半80%、後半60～70%合わせる事ができた。しかし、P、Qは教師の支援がないと取り組むことができず、「オーッ」に合わせて動作ができたのは40%以下であった(図2)。

リズムパターンは、四分音の連続と最後に四分休符を加えたものだが、ここでもM、Oはほとんど同期できていた。「オーッ」への反応がよかったNは、手拍子しているが同期できず、8～10回速く手拍子してしまうことがみられた。

P、Qは、リズムパターン全体に同期することができなかったが、部分的には同期できていた。Pは「オーッ」の部分から四分音で手拍子し続けることが多く、4/4 ♩ ♩ ♩ ♩ | への同期は50%以上できたが、四分休符で手拍子を止めることができず、4/4 ♩ ♩ ♩ ♩ | へ同期できた回数は1回だけであった。このことから、曲のフレーズやリズムパターンを理解して手拍子したというより、拍に合わせて手拍子し続けたと考えることができる。しかし、正確にテンポをとらえて手拍子していたことは評価できる。Qは耳ふさぎなどの影響で、取り組まないことが多くみられた。

2 自作曲「手拍子パン」

自作曲「手拍子パン」も、4/4拍子8小節の短い曲とした(楽譜2)。基本的には「手をたたこう」と同様な考え方で作曲したが、落ち着いた雰囲気なかで、四分音のみに拍打ちして同期することを課題とした。

曲の構成は、「手拍子パン」の「パン」に合わせて手拍子することを4回くり返し、後半は4小節拍打ちをするというものである。歌詞と手拍子する部分はすぐにつかむことができ、児童5人とも取り組むことができた(図3)。

M、Oは、前半部分の「パン」に合わせて手拍子することは確実にできていた。Qは、最初の段階では耳ふさぎが多く、取り組まないこともあったが、3回目から取り組むようになった。1回は、教師が耳をふさぐことによって活動することができた。Nは2拍(6回)、3拍(3回)、4拍(5回)手拍子することもあったが、取り組まないことも12回あった。Pは取り組まないことも多く、4拍手拍子を続けることもみられたが、3回だけ正確に合わせて手拍子した。

後半の四分音に合わせて手拍子する部分では、Nは手拍子しているが合わないことが多く、やめてしまう

こともあり、「ちょっとまった」と発言する場面も見られた。N自身合っていないことがわかり、どうにかしようとしているのだがうまくいかない、それでやめてしまうという解決策をとったと推察することができる。Oは合わせていたが、休みや八分音が入ってしまうことがみられた。Mも、休みや八分音が入ってしまうことがみられた。P、Qも休みや八分音が入ってしまうことが多く、取り組まないこともみられた。

3 自作曲の活用と児童の反応について

知的障害養護学校小学部児童にとって、特にM、N、Oにおいて、自作曲で用いたかけ声とこぶしをあげる動作、歌詞に合わせてタイミングをとって手をたたく活動は、リズム反応への興味関心を高め、活動に取り組むエネルギーを引き出すことがみられた。P、Qについては、反応した回数は少なく、学習活動への参加の状況や課題性の問題が影響したのではないかと推察することができる。そのなかで、2曲目に取り上げた「手拍子パン」の「パン」の部分にQが積極的な反応をみせたことは成果であったと考える。

後半のリズムパターンに手拍子で合わせる活動では7～16拍連続の手拍子を課題としたが、「手をたたこう」では、最後の部分で休み課題を組み込んだ。1拍のみの活動に比べると、リズムパターンの理解や休みへの対応、運動の持続などの問題が大きく影響すると考えられる。その点では、Nが手拍子しているが合わないという結果がみられた。今後、個別の対応やNの手拍子にリズムを合わせるなどの学習活動を導入することも試みる必要がある。Pにおいては、四分音で意欲的に手拍子し続けたが、休符に合わせて休む、タイミングをとらえて手拍子するなど、運動を調整する活動を高めていくことが今後の課題としてあげられる。

3組の児童の実態から、自作した2曲については、個々によって反応の状況に違いがみられたが、全員で取り組むことができた。しかし、児童の実態に幅があり、全員の課題を1曲に盛り込むむずかしさがあった。合奏のように、それぞれの出番や役割を考えた構成にするとか、個々に活動することを設定するなどの工夫も必要であることがわかった。さらに、曲調や曲のなかで、どのようにリズム同期の課題を設定していくか、生活年齢と精神年齢の発達を考慮して、個々の児童の実態に合わせて歌詞や曲の内容を構成していく必要も示唆された。

この研究は、平成18年度ヤマハ音楽支援制度(研究支援)を受けて行った一部をまとめたものである。

楽譜 1

手をたたこう

作詞・作曲・齋藤一雄
編曲・齋藤加代子

The first system of musical notation for '手をたたこう' consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a common time signature (C). The lower staff is in bass clef with a common time signature (C). The melody in the upper staff starts with a quarter note G4, followed by eighth notes A4 and B4, then a quarter note C5, and ends with a quarter rest. The bass line in the lower staff consists of a series of chords: G2-B2, G2-B2, G2-B2, and G2-B2.

The second system of musical notation for '手をたたこう' consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a common time signature (C). The lower staff is in bass clef with a common time signature (C). The melody in the upper staff starts with a quarter note G4, followed by eighth notes A4 and B4, then a quarter note C5, and ends with a quarter rest. The bass line in the lower staff consists of a series of chords: G2-B2, G2-B2, G2-B2, and G2-B2. The lyrics are: てをたたこう オーツ てをたたこう オーツ パン パン パン パン パン パン パン

The third system of musical notation for '手をたたこう' consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a common time signature (C). The lower staff is in bass clef with a common time signature (C). The melody in the upper staff starts with a quarter note G4, followed by eighth notes A4 and B4, then a quarter note C5, and ends with a quarter rest. The bass line in the lower staff consists of a series of chords: G2-B2, G2-B2, G2-B2, and G2-B2. The lyrics are: てをたたこう オーツ てをたたこう オーツ パン パン パン パン パン パン パン

楽譜 2

手拍子パン

作詞・作曲・齋藤一雄
編曲・齋藤加代子

The first system of musical notation for '手拍子パン' consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a common time signature (C). The lower staff is in bass clef with a common time signature (C). The melody in the upper staff starts with a quarter note G4, followed by eighth notes A4 and B4, then a quarter note C5, and ends with a quarter rest. The bass line in the lower staff consists of a series of chords: G2-B2, G2-B2, G2-B2, and G2-B2.

The second system of musical notation for '手拍子パン' consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a common time signature (C). The lower staff is in bass clef with a common time signature (C). The melody in the upper staff starts with a quarter note G4, followed by eighth notes A4 and B4, then a quarter note C5, and ends with a quarter rest. The bass line in the lower staff consists of a series of chords: G2-B2, G2-B2, G2-B2, and G2-B2. The lyrics are: てびょうしパン たのしくパン てびょうしパン たのしくパン

The third system of musical notation for '手拍子パン' consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a common time signature (C). The lower staff is in bass clef with a common time signature (C). The melody in the upper staff starts with a quarter note G4, followed by eighth notes A4 and B4, then a quarter note C5, and ends with a quarter rest. The bass line in the lower staff consists of a series of chords: G2-B2, G2-B2, G2-B2, and G2-B2. The lyrics are: パン パン パン パン パン パン パン パン

図2 自作曲「手をたたこう」におけるリズムパターンへ同期できた割合

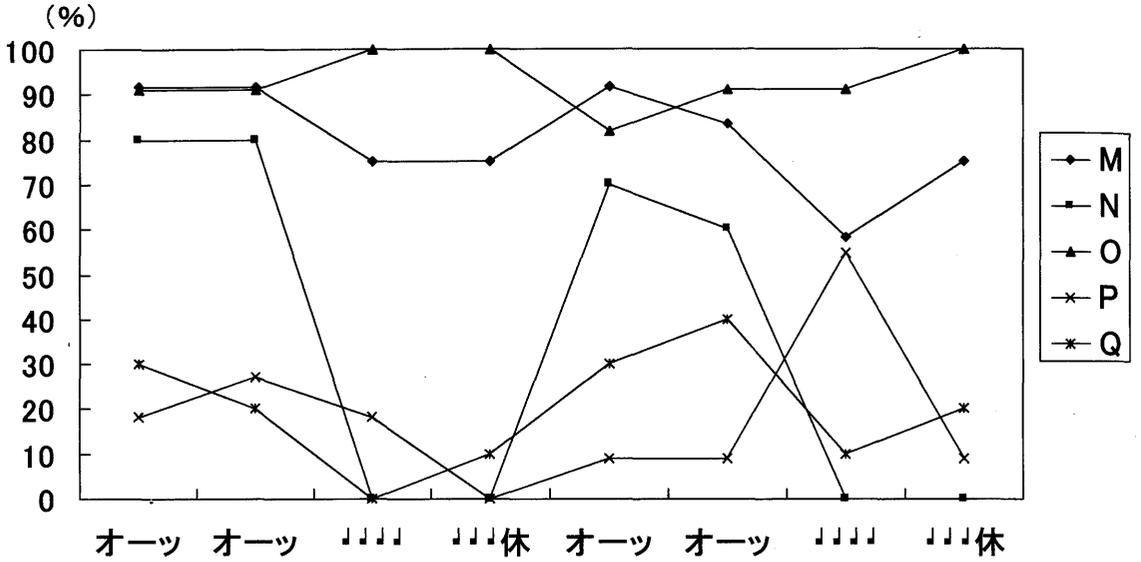
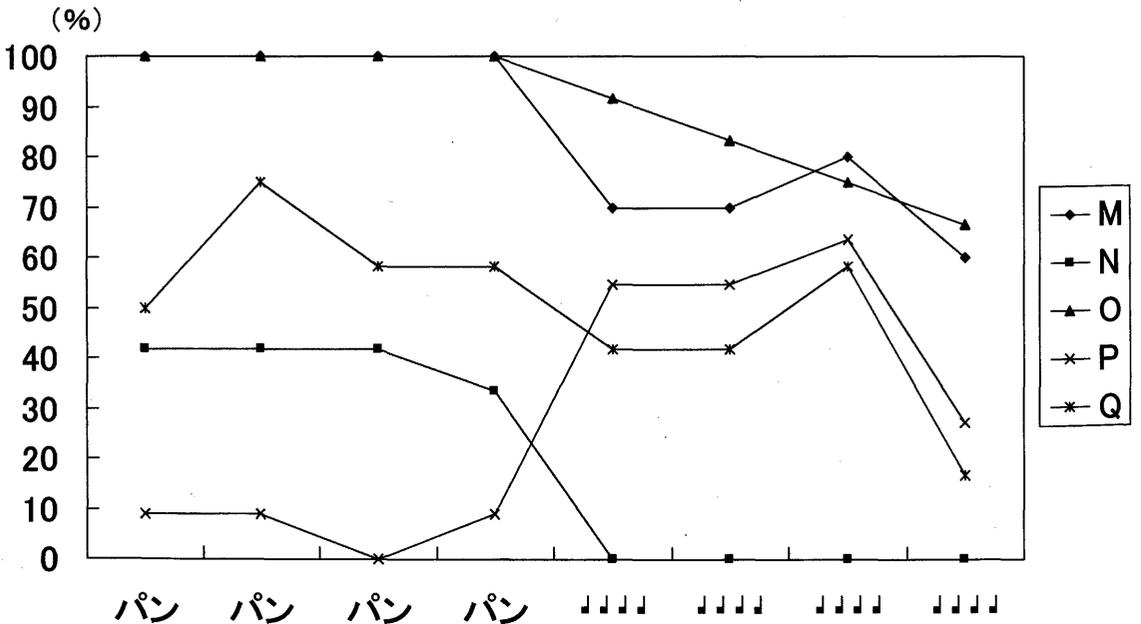


図3 自作曲「手拍子パン」におけるリズムパターンへ同期できた割合



文 献

文部科学省 (2002) おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆☆教科書解説. 東京書籍.

齋藤一雄 (2004) 知的障害児のリズム反応における歌唱教材の活用. 上越教育大学研究紀要, 24(1), 78-87.

齋藤一雄 (2005) 養護学校音楽科教科書の活用調査. 発達障害研究, 27(2), 147-152.

齋藤一雄 (2006) 自作の教材を活用したリズム同期の指導. 上越教育大学障害児教育実践センター紀要, 第12巻, 29-38.